**註**

① 「ホトトギス」明治32・10・10　蕪村句集講義　講者　子規・鳴雪・黄塔・碧梧桐・虚子〈記〉

② 「ホトトギス」明治31・3・30　輪講筆記　虚子〈記〉

③ 「ホトトギス」明治31・5・30　輪講摘録（五）　露月〈記〉

④ 「ホトトギス」明治31・12・10　蕪村句集講義（十一）　虚子〈記〉

⑤ 「ホトトギス」明治34・5・31　蕪村句集講義（卅九、夏十）　虚子〈記〉

⑥ 「ホトトギス」明治32・12・10　蕪村句集講義（廿三、春九）　虚子〈記〉

⑦ 「ホトトギス」明治33・4・10　蕪村句集講義（廿六、春十三）　虚子〈記〉

⑧ 「ホトトギス」明治34・6・31　蕪村句集講義（四十、夏十一）　碧梧桐〈記〉

⑨ 「ホトトギス」明治35・2・10　蕪村句集講義（四十八、秋二）　虚子〈記〉

（筆記回数　子規　六回、虚子　三十一回、碧梧桐　二十三回、青々二回、露月　一回）

⑩ 「兄弟のさつお（猟夫）中よきほぐしかな」（新花摘）で「さゝやく」の句形は見当らない。

⑪ 俳書堂刊の『蕪村句集論義』では「客觀的と主觀的との解釈の衝突」と改められている。

る。」とするのに対し、虚子は「月落ちかゝる」は「月光が人の上に落ちかゝつて明かに照らしてゐる、」というのではなく「月も西空に落ちた、といふ景色を、思ひ切つて四五人の上に月が落ちかゝるといつたのではあるまいか。」と反論し、「月の西方に落ちた事を四五人の上に月そのものが落ちかゝつたと大膽にいつたところが此句の主眼で、例の蕪村が主觀的叙法の大技倆を認めてやらねばならぬところだ。」とする。子規は虚子の解を認めながらも、「夜が更けたから月が落ちるといふ主觀ばかりになつては面白くないので大きな月が人の上に落ちかゝつてゐる客觀的の景色の方が主にならねばならぬのである。」とし「要するに 此句を以て夜の更けた踊り場の景色を主觀的に説明したのではなく、客觀的の景色を主として見せるのであるといひたいのである。」と説いている。

ここでもあくまでも虚子は蕪村の句を主觀的な句として評価しようとするのに対し、碧梧桐は事実ありのまゝを瞬間的に叙した写実的な句として理解しようとする。そして子規はさらに実景から得た主觀をも写実的に叙したものというけとり方をしているのである。

この子規のうけとり方は明治三十年、この輪講に入る前年に書いた「俳人蕪村」（明治30・4・13～12・29　ホトトギス）で示した蕪村の理解から出たものである。つまり、子規はこの中で「客觀的美」と「主觀的美」とを対比させて論じており、後世に下るに從って「一時代は一時代より客觀的美」に入るとし、後世の文学は、「客觀的に 動かされたる 自己の 感情を寫す」という点では少しも上代と違っていないが、「結果たる感情を直叙せずして原因たる客觀の事物のみ描寫し、觀る者をして之により感情を動かしむること、恰も實際の客觀が人を動かすが如くならしむ」という点において上代と違い、このために後世の文学は「真目を新たにした」という考えを明らかにしている。したがって、この「四五人に」の句についても客観的描写の中に作者の主観をみることになるのである。

以上、「蕪村句集講義」を通して虚子と碧梧桐とを眺めて来たのであるが、両者の特色を要約するならば、虚子は俳句中の景色が、「即自己」として還元可能であれば、そこに空想的、時間的な要素が入って来ても客観的俳句であるとするのに対し、碧梧桐はあくまでも自分の体験をもとにした「實景」をありのまゝに瞬間的に詠んだもののみを客観的俳句であるとしたということになり、これは二人がそれぞれ蕪村という古典を通して自己をみつめ、子規によってすでに見極められていた二人の資質の違いを、それぞれが蕪村を評し解釈することによってお互いのライバル意識――虚子の方が強いものであったが――を俳壇的な流れとして形成してゆく手がかりをもったと言えよう。

別な言い方をすれば、その対立は、そのまま「木の實植う」の論争、更には「温泉百句」の論争へとエスカレートする要素を充分にはらんだものであったと言えるのであり、新傾向運動、守旧派運動に発展する内的必然をもっていたと見ることが出来るのである。

の句について虚子は、玉川が高野山の上にある川で奥の院の前を流れて紀州の方に流れている川であることを青々より聞き、この句は「全く主觀の句で、高野山に咲いてゐる花は玉川に流れ去ってしまうのであろうか、といふのである。」「玉川は大きく無い川で、それに高野全山の花が實際流れ去るべき謂れがない。却て無造作に主觀的にいってのけた所に趣味がある。」とする。ところが碧梧桐は「高野の花は玉川に流れ去るのである、といふ方が穩當と思ふ。」と述べてあくまでも「實景」に即した純客観句であるとするのである。ここにも虚子の「空想趣味」と碧梧桐の「寫實主義」の対立をみることができる。

また、第⑧四十二回（明治34・6・1　老梅居、鳴雪・四方太・虚子・紅緑・碧梧桐（子規））の輪講で、

鵜舟漕く水窮まれば照射（ともし）哉　（蕪村句集）

の句について、虚子が「鵜飼の舟を段々漕ぎ上って行くと、追々に水の流れが狭く両岸も迫って來てもう舟も上れないといふ處まで來る、それが水窮まればで、山の方には照射をして鹿を狩りつゝある灯が見える處まで來たといふのである。鵜飼と火串の配合も珍らしい。又たその音調もひきしまって居って從來すきな句である。」と述べるのに対し、碧梧桐は、「虚子君はこの句を劇賞（ママ）されたに關らず、私は何の感じも起らない。」とし、「第一かういふ景色が實際あるものであらうか」という疑問を述べ、「一歩を譲って、照射を近山へ迄引下ろし、鵜舟を谷川迄引上げ、無理に両者を接近せしめて、さういふ事實があるものとしても、更に感じはないのである。」「つまる所此句は鳴雪（ママ）翁の御説のやうに、鵜舟と照射の稍や似通った所を對照したのに過ぎない、一種の理窟の句と解する外無いと思ふ。」と反論、子規も、「全く理窟的の句で、一方は山、一方は水で共に灯をつけて殺生するもの、其れを理想的に一筋の川で連絡をつけて其鵜飼をする水上では照射をしてゐるといふだけの事である。面白くないと思ふ。」とこれに同調する。しかし、虚子は、「斯る實景何處にも無しとは斷ずべからず且つ蕪村の空想より産み出したる景色とするも差支なし。子規碧梧桐両君が理窟を厭味とのみ感ぜらるゝ側に余は其空想的（？）光景の内に趣味を感ずる也」と自説を曲げようとしない。

この「空想」と「實景」との対立が、先に挙げた「さみだれや」の句を鑑賞するにあたって虚子が強引なまでに自説を主張した第四〇回（明治34・4・20）より二ヵ月後であるということによっても虚子と碧梧桐との鑑賞差がはっきりとした作句意識を背景にしてなされたものであったということが出来るのである。

次に注目すべきものに第⑨四十九回（明治35・1・20　於老梅居鳴雪・碧梧桐・紅緑・虚子（子規））の輪講がある。

即ち、

英一蝶か畫に賛望されて

四五人に月落ちかゝるおとり哉　（蕪村句集）

の句について、碧梧桐が「唯四五人踊ってゐる其に月光が上から浴せかけるやうに明かに照らしてゐる其瞬間の光景を叙したのであ

をとりあげて、碧梧桐が「調子の強い句で五月雨の景色によく調和してゐる。」とし、「家二軒と限ったのは偶然かも知れぬが動かぬ。」と述べ、この句を純客観句として評価しているのに対し、虚子は、「大河を前に」としたところに「多少の主観が句の内に含まれてゐる。」とし、「假りに此句を、『大河の前の家二軒』としたらどうであらう。若し純客觀純寫生の句にせうとおもふなら是非斯ういはねばならぬ。」「大河の前の家二軒」では「『大河の前に在る家二軒』といふだけ位なことだが、『大河を前に』だと『大河を前に控へてゐる』といふ位の強い意味にな」り、この「控へてゐる」という言葉の内に「主觀」があるとする。そして「蕪村は冷やかな純客觀の寫生に甘んぜず、やゝ熱してやゝ主觀を加へて此句に活動を與へて居る。」「蕪村の句の多くは此種の主觀の加味してあるのが多い。此種の主觀を交へてある句には必ず調子がひきしまった何だが其句が一種の高朗な音を發しつゝあるが如く感ぜられる。」と自説を吐く。

これに対し、四方太は「蕪村の句が高朗な音調を有してゐる事は誰しも異論はあるまい。只此段の虚子君の説によると、蕪村は一種の主觀を交へて調子を強くするので、純客觀純寫生の句は常によろ〳〵した弱い調子になるといふ様に聞える。」「純客觀の句でも言葉の種類と配置とに由て非常に強くもなり弱くもなる。」と反論するが、虚子は「悉く然りとはいはず、併し概して然りとは斷言して置く。」と答えている。

つまり、この事は、虚子が碧梧桐の特色として子規によって認められた「印象明瞭なる句」、いいかえれば絵画的純客観句の価値を低く評価しようとするものであり、碧梧桐の蕪村理解の度合いが浅いものであることを指摘しようとしたものと言えよう。

ところで、この「蕪村句集講義」全体を通して二人の間に顕著な意見の対立を見出すことが出来る個所を抽出する時、それらの個所が虚子によって筆記されたものであり、碧梧桐が筆記した個所にはほとんど見当たらないというのも偶然とは思われず、虚子の方がよりライバル意識が強く、自説を前面に押し出そうとしていたことが窺えるのである。

このような対立を更に二、三例示するならば、第[8]二十三回（明治32・11・17　於子規庵、子規・鳴雪・碧梧桐・黄塔・青々・虚子）の輪講で、

遅き日や雉子の下りゐる橋の上　（蕪村句稿張交屏風）

の句について虚子が「人の通るものである橋の上に、人に近かんものである雉子が下りてゐるといふので、静かな山邊の遅日の趣きが最もよく現われてゐる。」と述べ、「趣き」に重きをおいて鑑賞しているのに対し、碧梧桐は「其の人の通るものである橋の上に人に近かん雉子が下りてゐるといふところが此の句の缺點ではあるまいか」とし「實景にある間敷景色であつて多少造り物のやうな感じがある。」と「實景」に重きを置いて鑑賞しようとすることによっても対立を生じている。

これと同じく、第[7]二十七回（明治33・3・20　於子規庵、鳴雪・碧梧桐・青々・虚子）の輪講で、

玉川に高野の花や流れ去　（蕪村句集）

して居るのではあるまいか。」と述べる。

つまり、子規は時間を含まない空間的な油画的なものを「純客觀」として「油畫を能く見たり明治の俳句を見た者には此思想は何も珍しき事では無」いと説くのであり、この事は子規が「明治二十九年の俳句界」の中で「二十九年中に製作せられたる俳句が一般に前年に比して進歩したるは著しき事實なり。」といい、芭蕉・蕪村・梅室らと「殆ど全く種類を異にする者」として碧梧桐の「極めて印象明瞭なる句」を推挙したことと密接に関わる発言といえよう。

さて、この客観的・主観的という点について第④十一回（明治31・11・5　於子規庵、鳴雪・子規・黄塔・碧梧桐・露月・四方太・墨水・虚子）の輪講で、

葱買ふて枯木の中を歸りけり　（蕪村句集）

を鑑賞するにあたり、墨水が「冬枯の景色であって葱と枯木との對照が最も面白いと思ひます。侘た貧しい人が黄昏になりて葱を買ふて枯木の中を歸つて来る所で晩方の景色だと思ひます。」とする。これを機に「作者自身が葱を提げて枯木の中を歸りつゝある時の句」とするか「作者ならざる人が枯木の中を葱提げて歸りつゝあるを作者が目の當り見てゐるもの卽ち一幅の繪畫の如きもの」とするかという議論となる。そこで虚子は「私の考へでは强て作者自身を此の景色中に持ち出し來る必要はないと思ひます。卽ち作者は造物者の如く全智全能で、空中にでも居て、其の人物の過去の行爲をも能く知てゐるものとして差支へないと思ひます。」「又發句も詩たる以上は繪畫同様単に空間を現すものとすべき理由なく却て空間をも時間をも現はすものとするが穩當なるわけでありますれば此の句を繪畫的の客觀の景色に見て其の内の人物の過去の行爲を時間的に現はしたるものとして更に差支へないことゝ信じます。」と述べる。これは、碧梧桐らが作者自身が葱を提げて帰りつつあるとするのに対して述べられたものである。

しかし、これは碧梧桐が「葱提げて居るのを見て直に『葱買ふて』といふことを想像し得るでゐやうか。私は特に『買ふ』といふ必要を感じない。」と述べていることによっても知られるように、碧梧桐はこの句が作者自身のことではあっても、作者自身が自分をも素材として詠んだ絵画的純客観的の句といふ理解を示したものであり、したがって「買ふ」という過去の行為を想像させることばを必要なしとしたのである。

つまり、碧梧桐はあくまでも子規の言う絵画的・純客観的なもののみを客観的な句とするのに対し、虚子は自己の心情に関わることを詠んだのでなければたとえ時間を含んでいても客観的な句だとするのであり、ここに子規によって指摘された「人間を見るは猶無人の草木を見るがごと」き碧梧桐と、「草木を見るは猶有情の人間を見るがごと」き虚子との違いを見ることができよう。

このような二人の違いは、さらに第⑤四〇回（明治34・4・20　於老梅居、鳴雪・四方太・碧梧桐・虚子）の輪講で一層明確になる。

即ち、

さみたれや大河を前に家二軒　（蕪村句集）

最初に二人の違いが明らかになるのは第三回[2]（明31・3・5於子規庵、碧梧桐・露月・修竹・子規・虚子）の輪講である。

即ち、

水鳥や百姓ながら弓矢取　（蕪村句集）

の句について、碧梧桐が「百姓が水鳥を射て取るところを見て百姓ではあるが弓矢取だとしやれたのであらう、」と実景としてとらえるのに対し、子規は「左様に客觀の景色でなくって、『鳴なくや弓矢をすてゝ十餘年　去來』自然と此の句の連想から來」たもので、「今は百姓ではあるがもと弓矢取であったとか、百姓でも特別に弓矢取の家筋であるとかいふ主的觀（ママ）の意味ではないかしらん、」と反論し、これに虚子が「兎も角もこの句は弓矢取といふ語に重きが置かれているやうだ。さうすると去來の句と淺からざる關係があるのかもしれん、」と同調するもので、これを子規は「客觀的と主觀的との解釋のしやう」[11]であるとする。

この「主觀的」、「客觀的」ということについては、第五回[3]（明治31・5・5　於子規庵、子規・鳴雪・虚子・碧梧桐・露月）の輪講で、子規は次のようにこれを明らかにしている。

即ち、

水鳥や枯木の中に鴛二挺　（蕪村句集）

を講じる中で「蕪村の句といへば直に客觀といふ事を聯想する位で古來の俳句界に於て最も客觀的なる句を求めたら蕪村の句杯が選に當るであらうが、さて油畫的純客觀的の句を求めるとなると殆ど皆無の有様」であると述べ、蕪村の句を例示して吟味してみせる。

まず、

方百里雨雲よせぬ牡丹かな　（新花摘）

絶頂の城たのもしき若葉かな　（蕪村句集）

については「方百里雨雲よせぬ」と「たのもしき」が「主觀的」であるとし、

殿はらの名古屋貌（なごやがは）なる鵜河かな　（新花摘）

では「名古屋貌」が「主觀的」、

われぬべき年もありしを古火桶　（蕪村句集）

鮎くれてよらで過ぎ行く夜半の門　（落日庵句集）

の二句には「時間」があり「時間は繪畫に現はせぬ處を見ても純客觀の事で無い」とする。

同じく[10]

兄弟の獵夫さゝやく火串かな　（新花摘）

詠物の詩を口すさむ牡丹かな　（新花摘）

の二句を挙げて「さゝやく」「口すさむ」の語に「時間」が含まれていることを理由に「多少主觀的の處がある」句とするのである。

また、

草霞み水に聲なき夕かな　（蕪村句集）

については「餘程客觀的なれど景色が餘り廣き故一瞥して見ること出來」ず「時間が出來て來るから純客觀にはならぬ處がある。」とする。結局子規は「純客觀的になって居るといふのは蕪村にも一句も無」いと述べ、この「水鳥や枯木の中に鴛二挺」の句は蕪村としては例外的に「ひょつとしたら」「油畫的趣味即ち純客觀趣味を現

誰も豫想するに忍びなかつたのである。」「既に脚部に水氣を持ち非常に苦痛を感じ居られた時であったから従前の通り矢張り枕頭にて開くべきか、他にて開く可きかたづねしところ矢張頭にてやれとの事。例のモヒを頓服して始めの間は苦悶の間に尙我等の説を聞いて居て、時々意見を吐かれるに皆驚いた」「輪講半頃から苦悶愈甚だしきを加へて我等は最早枕頭で喧しく論議するに忍びぬやうな心持がしたので、止めやうか、とたづねしところ、やれ、との事なりしまゝ更に續けて規定通り一枚を講了したのであつた。」（「ホトトギス」蕪村句集講義、虚子附記　明治35・10・10）と述べ、碧梧桐も「講義のうら淋しい、誰の聲も白みかゝつた時には、つい堪らなく息を呑んで、この一堂に立ち罩めた苦悩と惨鼻の雰圍氣に喘ぐのであつ」（『子規の回想』）たと記しているが、それらも、輪講への熱情を別な角度から物語っているといえよう。

子規没後は会場を老梅居とし、明治三十六年四月六日、秋の部の最後の句「冬ちかし時雨の雲もこゝよりそ」をもって五年四か月（六十三回）の長年月に渉った輪講を終わっている。

それでは、このような輪講の行なわれた明治三十一年から三十六年にわたる数年間は子規の高弟であった虚子、碧梧桐にとってどのような時期にあたるのか。この辺について一言触れておくと、明治三十六年は、虚子と碧梧桐との対立が「木の実植う」の季題をめぐり表面化している。

この対立というのは鳴雪・虚子が「木の実植う」の季題を「仙人が山の中で木の実を拾ふとか、又た植ゑるとかいふ事から起った感じ」としたのに対し、碧梧桐は「山林家が杉とか檜とか山へ植付けるやうな」「實地の場合を捕へ」（「疑問」明治36・11・12『俳諧漫話』新聲社刊）たことによって生じたもので、虚子の伝統的空想的な季題趣味と碧梧桐の写実主義との対立であり、この対立はさらに碧梧桐の「温泉百句」に対する虚子の批評を機に俳壇的な出来事として表面化することとなる。

そして、この対立は溯れば明治二十九年、子規が「碧梧桐は冷かなること水の如く、虚子は熱きこと火の如し、碧梧桐の人間を見るは猶無心の草木を見るが如く、虚子の草木を見るは猶有情の人間を見るが如し、隨つて其作る所の俳句も一は寫實に傾き一は理想に傾く。一は空間を現し一は時間を現す。是れ二人の全く相異なる所なり」（「文学」明29・11・20「日本人」）と評し、さらに「明治二十九年の俳句界」（明治30・1・3～3・21「日本人」）において、碧梧桐に対して「印象明瞭」、虚子に対して「時間的・人事的」な俳句にその特色があるとしたことの延長線上にあったものといえよう。

つまり、「蕪村句集講義」の行なわれた五年四か月という期間は、子規によって虚子と碧梧桐の違いが指摘されてから、子規没後二人の対立が俳壇的な出来事として表面化するに至るまでの期間であったと言える。

そこで、以下具体的に「蕪村句集講義」を眺めていくことにより子規によって指摘された虚子と碧梧桐の違いがどのように現われているかを考察したいと思う。

る。その鳴雪について碧梧桐は「『雄辯と大聲と、兎も角或る理路を辿る論旨の鮮やかさは、さうして相手の弱點を捕へるに敏なる餘裕とは、好んで議論の相手を物色して、揶揄半分自ら快と』（『子規の回想』）し、「談論風發一座を賑はす源泉」（同）であったと回想している。

なかでも、明治三十二年九月二十二日の輪講[1]で子規と鳴雪との激論は黄塔、碧梧桐、虚子といった同席者をハラ〳〵させ「言葉遣ひも粗暴になって、仲裁に入るべき餘地もな」（同）いほど猛烈なものであった。

その辺を具体的に記してみると、

歸る雁田ことの月の曇る夜に　（蕪村句集）

の句について、虚子が「表面の意味は姨捨山の田毎の月の曇る夜に雁の歸るといふ即景たるに過ぎ」ないけれど、「裏面の意味は特に田毎の月といひたるところに在り」「田毎の月といへば普通に秋月の清輝を想像せしむべく、雁の來る時は、一點の曇りも無き月夜なりしも、歸る時は朧々として曇れる月夜なることを對照していへる所に此句の働きはあるなるべし。」と解し「善き句とは思はず。」と述べるのに対し、鳴雪が「虚子氏の裏面の意味は賛成せず、私の裏面の意味する所は歸雁を惜むあまりに月も曇るといふ主觀の趣に在り。」と反論し、それに子規が「鳴雪氏の如き解釋は月並臭味ありと思ふ。」と述べて虚子説を支持する。

この子規発言に対し鳴雪が「さては子規氏等には雁の別れを惜むといふ如き事に美感無きなるべし。」と反撃するところとなり、「子規との間に殆ど一時間に渉れる長議論」（同）を戦わし、ついには「美の標準論」（同）にも及んだりするのである。

この夜の状況を碧梧桐は「子規は床上に横になつてゐた、と思ふが、病人にどうしてアンナ大きな聲が出るのかと驚かれもし、病人相手に鳴雪も大人氣ない、と少々癪にも障つた。」（同）と回想している。子規も、その夜すぐ家人に誡められて鳴雪に宛て「如何に發熱中とは云へ先生へ對して侵したる無禮は偏に御海容を祈る外無御座候今後を謹み可申候」（鳴雪宛書簡　明治31・9・22）と書き、追伸に「自慙」と題して「蘭の花吾に鄙吝の心あり」「蓄椒廣長舌をちゞめけり」「十年の狂態今にかゝし哉」の三句を添えて謝罪している。

これに対し鳴雪も「這般快事他人は解する能はず、何ぞ敬と不敬とにあらんや」「胸中光風霽月秋天一塵を留めず」（「ホトトギス」蕪村句集講義附記　子規記　明治32・10・10）と返事をする。

この激論以後、二人が「再び舷々相摩する壯觀は見られ」（『子規の回想』）ないが、これは「お互いが相誡めたといふより、子規の病狀が日に月に進んで、自然に口舌のつかみ合ひをする機會を解消し」（同）たためであるとするが、何れにせよ、この会の雰囲気を如実に伝えている。

子規を囲んでの輪講が、最後にどのようなものであったかを三十五年九月十日に開かれた際の感想として虚子が書いているので参考までに記すと、「明治三十五年九月十日の夜は蕪村句集講義席上に子規を見る最後の日であるとは當夜誰も豫想しなかつたらう。否

碧梧桐・鳴雪は全出席、四方太の八回、紅緑の七回、烏堂の一回である。

秋の部は、明治三十四年十二月九日の第四十八回より明治三十六年四月六日の第六十三回完結までの十六回で、会場は子規の希望により明治三十五年四月二十九日(第五十二回)から子規庵にもどり、子規没後の第五十七回(明治35・10・3)より再び老梅居で終回まで行なわれた。講者は、子規の九回(うち四回は追記)、鳴雪・碧梧桐・虚子の全回、それに紅緑の八回である。

したがって、四季全体では、虚子と碧梧桐が同席したのは四十九回である。

この輪講筆記は、子規、虚子、碧梧桐等が交代で担当し雑誌「ホトトギス」に、第一回から第八回まで「輪講摘録」と題して、それ以後は「蕪村句集講義」として連載され(「ホトトギス」では明治三十三年二月二十二日と同年三月二十日の輪講をともに第二十六回としているため、以後一回ずつずれる。)のち、単行本として俳書堂より刊行されている。

即ち、

冬の部　明治三十三年三月十五日　第一版
(明治44・2・10　第九版まで)

春の部　明治三十三年九月十五日　第一版
(明治44・10・1　第九版まで)

夏の部　明治三十五年一月二十日　第一版
(明治44・1・20　第七版まで)

秋の部　明治三十六年六月七日　第一版
(明治43・3・25　第七版まで)

と刊行、それぞれ版を重ね、明治四十四年五月二十日には四季合本として刊行(俳書堂)されている。

参考までに記すならば、この後の明治三十六年五月より同三十九年四月に至るまでの三年間、鳴雪・碧梧桐・虚子らによって毎月一回、老梅居または碧梧桐庵に会し、「蕪村遺稿」を輪講し、これも「ホトトギス」に連載し、のち俳書堂より単行本として刊行、大正五年三月には先の「蕪村句集講義」と合本して刊行されこれも版を重ねる。

子規周辺に於ける、この輪講に対する当時の感想としては、第一回目について虚子・碧梧桐ともに「わからん處は子規がやつてくれる」(『子規の回想』)だろうという「相變らずの他力本願」(同)という程度の心づもりで、下調べもせずに出掛けたと述べているように、自由な発想による発言が見られる。

この第一回の輪講の記事は、翌月の「ホトトギス」に掲載されその序文で碧梧桐は「必ずしも迦陵頻伽の聲を聞き菩薩の天冠を覩茯苓を嚼み槇縒(ママ)を飲みしとはいはず、唯だ其暢達縱横の作を品し其經營慘憺の痕を覩以て自ら鑑み思想の停滞と言詞の澁晦とを醫せんとするのみ」(「輪講摘録(一)」明治31・2・28「ホトトギス」)と述べ抱負を明らかにしている。

句の解釈についての議論は、多く鳴雪、子規の間に戦わされてい

# 虚子・碧梧桐の対立

## ――「蕪村句集講義」を通して――

栗田　靖

1

『蕪村句集』の輪講は明治三十一年一月十五日、子規庵において正岡子規、高浜虚子、河東碧梧桐の三人によってその第一回が開かれる。

この集まりで、『蕪村句集』がとりあげられたのは、日本派内に於ける

「當時の蕪村崇拝」（『子規の回想』河東碧梧桐著、昭和19・6・10　昭南書房）に関わり、

「イヤな句に出喰はす場合が少」（同）なく、「餘り手間がかゝらない、さうして永つゞきするもの」（同）、更に「讀者にとつても、幾分の興味と參考になるもの」（同）という条件を満たすものとして蕪村の句が高く評価され、それを新しい眼で見直そうとしたことによる。

「蕪村句集講義」そのものは、几董編の『蕪村句集』を底本とするもので、

冬の部は、第一回の明治三十一年一月十五日から第十四回の明治三十二年二月七日まで、いずれも子規庵で行なわれている。講者の出席状況は子規の毎回を筆頭に、虚子の九回、碧梧桐八回、鳴雪七回、露月四回、四方太・墨水の各二回、修竹・黄塔の各一回の順でその間、虚子と碧梧桐が席を同じくするのは第一回より、三、五、九、十、十一、十二の計七回である。

春の部は、明治三十二年三月九日の第十五回より明治三十三年六月二十日の第三十回までの十六回で、会場は子規庵、講者は、子規の全出席についで鳴雪の十五回、虚子の十二回、碧梧桐の十回、黄塔・青々の各六回、愚哉・肋骨・鬼史の各一回の順であり、虚子・碧梧桐が同席したのは第十七回をはじめ、十九、二十、二十一、二十三、二十六、二十七、二十九、三十の計九回である。

夏の部は、明治三十三年七月三十一日の第三十一回から、明治三十四年十月二十日の第四十七回までの十七回で、会場は第三十四回（明治33・11・5）に老梅居（鳴雪宅）に移り、次回は一旦子規庵にもどるが、再び第三十六回（明治34・1・10）から老梅居となる。この間、虚子宅でも一回（明34・7・20　第四十四回）行われている。講者は、子規が十六回（うち十二回はあとからの追記）、虚子、